

長岡空襲ものがたり

あの夏の

「8月1日」



長岡空襲体験談保存プロジェクト
一般社団法人 長岡青年会議所
2013年度 灯籠委員会

〜長岡まつり〜

それは、ある夏のこと。

夏休みが始まって一週間が過ぎた八月一日の夜だった。
僕と父さんは不思議な体験をした。

「父さん、今日から長岡まつりがはじまるよ。」

大手通りで民踊流しやお神輿がたくさん出るんだって。
ねえ、僕たちも見に行こうよ。」

「ええ、だって花火は明日と明後日だろ。」

長岡まつりは明日からだよ。

何と言っても、日本一の大花火大会だからな。」

「ちがうよ、父さん。長岡まつりは今日からなんだって。」

友達みんな、毎年、民踊流しを見に行っているって、
言ってたもん。」

「人がいっぱいいるところは、花火だけで十分だよ。」

あんまり行きたくないけど、仕方がないな。」

乗り気でない父さんの手を引いて、
僕たちは、祭り会場へと向かった。



くアオーレ長岡く

そこには、たくさんの人たちが、
おそろいの浴衣ゆかたや半纏はんてんを着て祭りが始まるのを待っていた。

「父さん、綿わたあめ買ってよ。あっちが、おいしそう。」

僕ぼくが賑にぎやかな雰ふん囲いき気にはしゃいでいると「長岡じんく甚句」が流れ始めた。

「父さん、民踊みんよう流しが始まるよ。あっちに見に行こうよ。」

そう言いかけた時、
僕ぼくと同じ年ぐらいの浴衣姿ゆかたの女の子が僕ぼくの目に入った。

「父さん、あの子が持っているあれ、なに。」

「ああ、あれは灯籠とうろうだよ。でも、灯籠流しとうろうなんてやっていたかな。」

「ソイヤー、ソイヤー、ソイヤー」

いつしか神輿みこしも動き始めていたようだけど、
僕ぼくたちはその子の後ろをただ歩いていた。



柿川灯籠流し

ふと気がつくのと、いつの間にか僕たちは橋の上に立っていた。
周りを見渡すとそこはライトで照らされ、
大勢の人たちが川に降りて行くのが見えた。

「父さん、何をやっているのかな。」

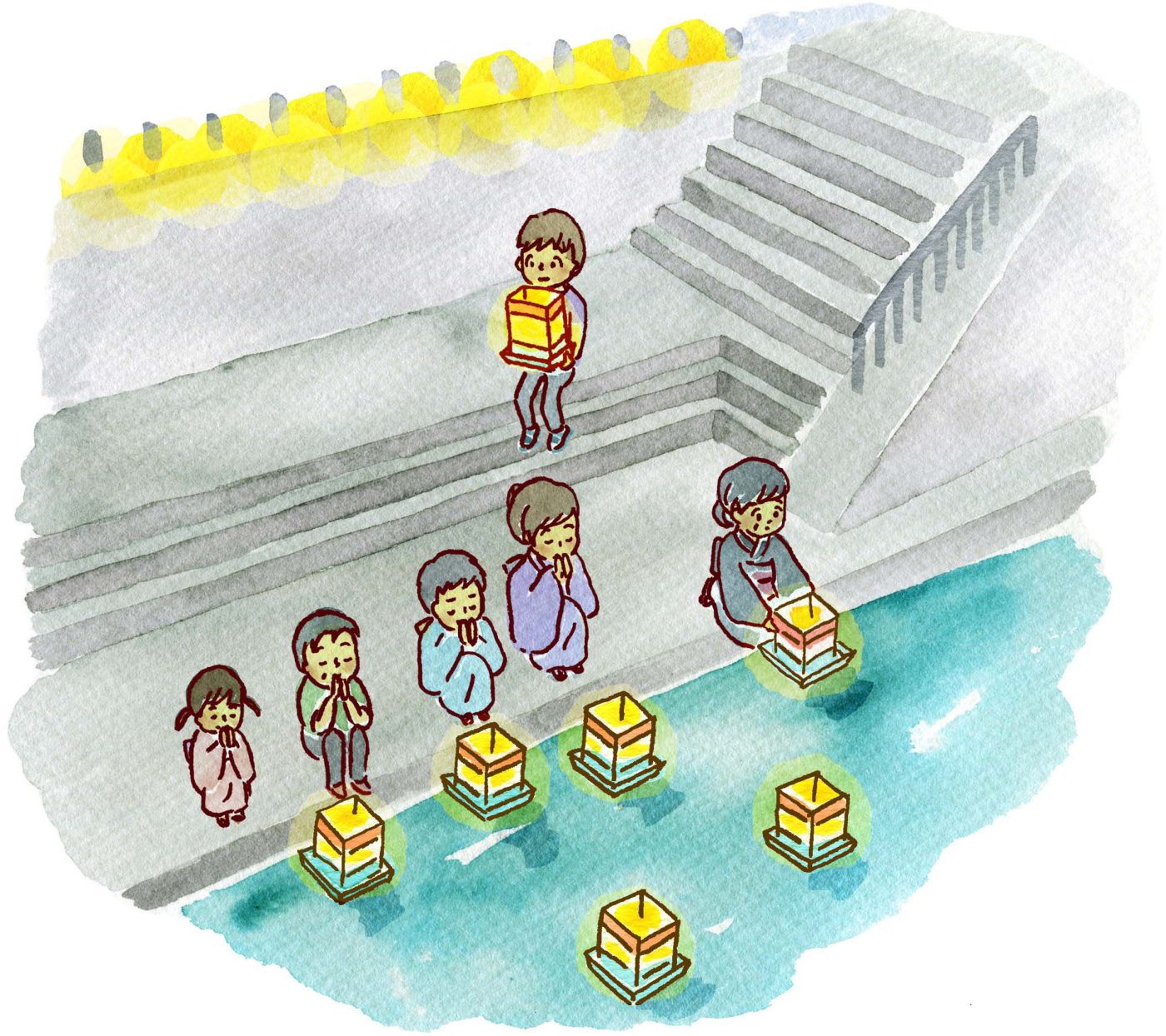
「灯籠流しかな。でも、長岡に長年住んでいるけど
こんなことをやっているなんて、知らなかったなあ。」

ほのかな灯りが、次々に川を流れていく。
祈るように手を合わせ、流れる灯りを静かに見守る人々。

「綺麗だね。」

「そうだな。でも、なんでこんなところで。」

父さんが、静かにそうつぶやいた。



〜 途惑い 〜

「ここは柿川。たくさんのいのちが眠っている川。」

突然の声に少し驚き、後ろを振り返ると先ほどの女の子が立っていた。僕と同じぐらいの背丈の、色白の、目のぱっちりした女の子だった。周りには僕と父さんと女の子しかいない。

「たくさんのいのちって、どういうこと。」

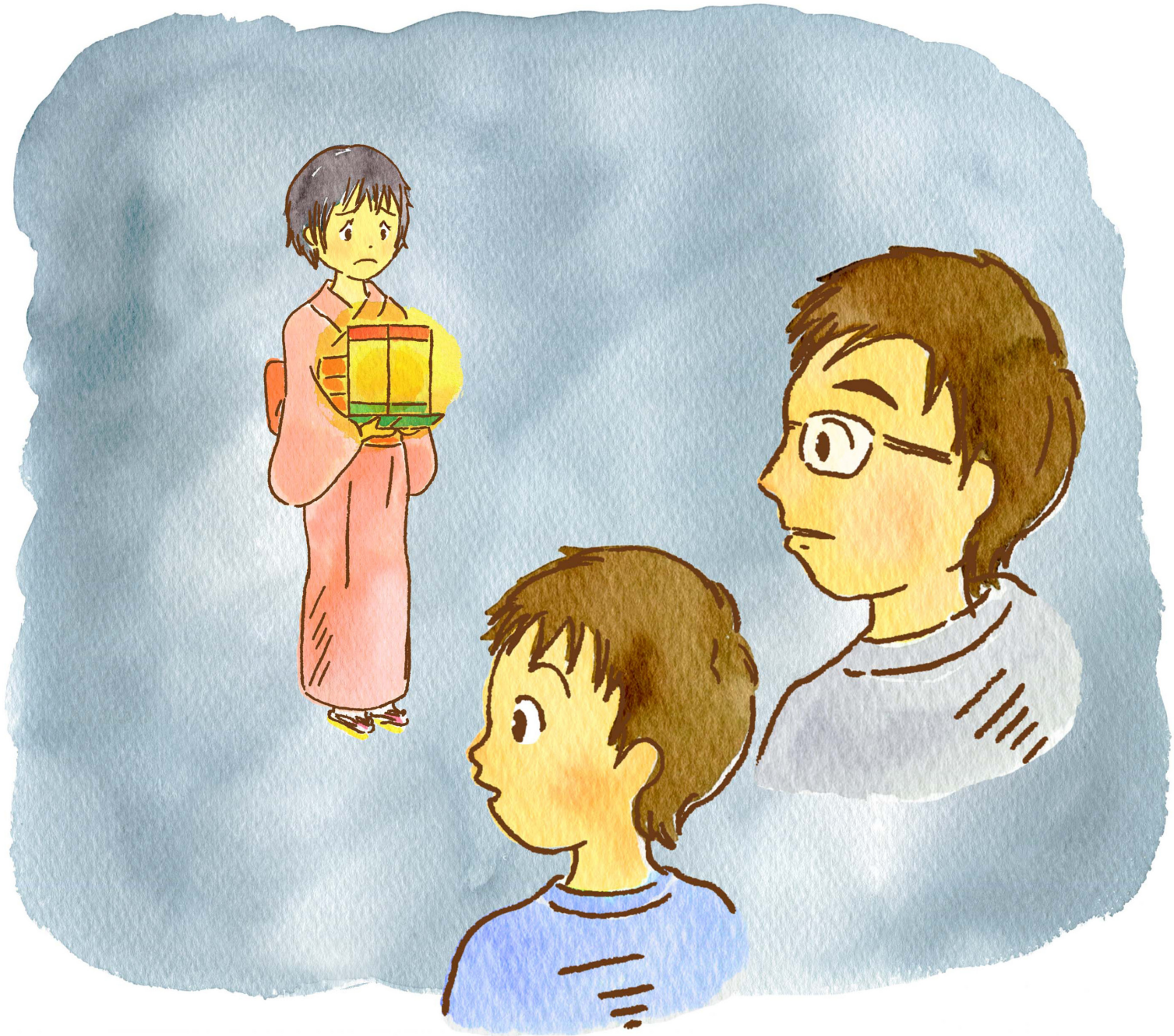
「ここで死んでいった人たちのいのち。」

「えっ、どういうこと。わかんないよ。」

僕は叫ぶように聞いていた。

「そう、何も知らないのね。」

女の子が淋しそうな目をしたと思った瞬間、僕たちは、まぶしくて目が開けられなくなった。



昭和20年の柿川

ようやく目が開けられるようになった。

さっきまでいた女の子はいなくなっていた。

そこは川のほとりで、どこか古めかしい家が立ち並んでいた。

「おっ、ホタルだ。」

「わあ、こんなにたくさんホタル、僕初めて見たよ。」

僕はそのホタルの数に驚いた。でも、一体ここはどこだろう。

そんなことを考えていると遠くでけたたましい音が鳴り響いた。

「父さん、何の音。」

「サイレンだな。何かの警報かな。」

父さんの顔がこわばっている。

『空襲警報だ。』

突然、誰かの叫び声が聞こえ、瞬いていたホタルの光が一斉に消えた。耳を塞いでも、その大きく不気味な音は頭の中に響いてくる。



く 長生橋上空 く

『ウウウーーン、ウウウーーン、ウウウーーン。』

一瞬、音が大きくなったと思ったら足元が揺らいだ。次の瞬間

「うわあ、空を飛んでいる。」

足元に見覚えのある橋が見えた。

「えっ、あれって長生橋。」

『グオングオングオン』

遠くから低く不気味な音が聞こえてきた。

「なんだ。」

父さんが震えた声でそうつぶやいた。

遠くの山向こうから黒くて大きなものが無数に飛んでくる。

『グオングオングオン』

「飛行機だ。」

見たこともない大きな飛行機が、空を埋め尽くすように飛んできた。



〜
爆撃
〜

『ヒュ〜〜ババ、・・・ドーン』

『ドーン』

『ボン、 ボン、 ガガガ。』

その飛行機ひこうきは、大きなおなかを開き、
たくさんの筒つつを落としていく。

その度たびに、僕ぼくの足元で街まちが燃もえていく。

『グオングオングオン』

「また来たぞ。」

飛行機ひこうきが僕ぼくたちをめがけて迫せまってくる！

「うわあ、危ない。」

ぶつかったと思った瞬間しゆんかん、

今度は燃もえ盛さる街まちの中にいた。



く 燃え盛る柿川 く

まさにそこは地獄だった。

お母さんの背中せなかでぐったりして動かなくなっている赤ん坊あかぼう、
体に付いた火を消そうと転ころげまわる人、
道端みちばたで動かなくなつて燃もえている人。

「爆弾ばくだんが降ふつてきているんだ。」

僕ぼくはようやく気が付いた。

目の前では、体に火が付いた人々が悲鳴ひめいをあげながら、
次々と川へ飛とび込んでいく。

そこは、さつきまで静しずかに水が流れ、

ホタルの飛とび交かう風景ではなかった。まるで火の川だった。

嗅かいだことのない人の肌はだの焦こげる臭においが僕ぼくの鼻はなをついた。

父ちちさんも僕ぼくも、目の前で命いのちが失なわれていくのを、
ただ見る事しかできなかった。

『平瀉ひらがた神社しんじやの防空壕ぼうくうこうへ逃げろ』

誰だれかが叫さけんだ。

人々の流れに僕ぼくたちも続いた。



〽 平瀉神社 〽

ようやくたどり着くと、人々が呆然と立ち尽くしていた。

「あれじゃ、ひとたまりもない。」

炎の中から、助けを呼ぶ声が聞こえてきた。

僕は思わず耳を塞いだ。

「なんで、こんなにひどい事を。」

僕の言葉に、後ろから答えが返ってきた。

「これが、長岡の悲しい歴史『長岡空襲』。

昭和二十年八月一日に起こった事実。」

振り返ると、さっきの女の子がいた。

「アメリカとの戦争で長岡には数えきれないほどの爆弾が落とされ、
一晩でなんの罪もない人がたくさん殺された。」

この柿川と平瀉神社は多くの人が亡くなった場所なの。」

「戦争。アメリカと。僕、何も知らなかったよ。」

僕は涙が止まらなかった。



く
がれきの街
く

いつしか朝になり、明るくなると、
被害の様子次第に見えてきた。

うつろな目で歩く人。

座り込んで動けなくなっている人。

子どもを抱えたまま黒焦げになっている人。

家族の名前を呼ぶ声がそこかしこで聞こえている。
街は焼け焦げ、がれきと化していた。

「ひどい、何もないじゃないか。」

遠くに長生橋だけが見えている。

「昔日本で戦争があったことは知っていたけど、
まさか長岡でこんなことがあったなんて。」

父さんは膝から崩れ落ちて泣いていた。



「そう、長岡の街は何もかも焼けて無くなったのよ。
でも、この悲しみを乗り越えて

長岡の人たちは今の街を創り上げたの。

だから、あなたたち今長岡を生きる人たちには、
その感謝の気持ちをおれないで欲しいの。」

女の子が優しく微笑んだ。

気が付けば再び、僕たちは、灯笼流しの会場にいた。
手には灯笼を抱えていた。

僕と父さんは、互いに眼を見合わせると、そっとうなずき、
静かに灯笼を流した。

僕たちの手を離れたやわらかな灯りが
他の灯りと並んで静かに揺れていた。

「ありがとう」

どこかで女の子の声が聞こえた気がした。
僕たちは自然と手を合わせていた。



く 白菊 く

『ヒュゥゥゥゥ、ドーン。』

真っ白な真ん丸の花火が上がった。

「父さん、あの花火は空襲くうしゆうで
亡くなった人たちのための花火みたいだね。」

「そうだね。今を生きるみんなで、
戦争せんそうの無い世界を目指していかないといけないね。」

僕ぼくと父さんは、白くてやさしい花火を見つめていた。



